

現場発！先生の声

高鍋高校
井上健吾さん



「対話でぶつける日」では、講師陣に「当日はよろしく」と丸投げするのではなく、実践するうえで大事なことを事前に理解していただく必要がありました。でも、学校現場には地域の方々に講師役を依頼し、意識を共有するまでの余力はありません。そうした課題をコーディネーターがすべて解消してくれました。私の意図をよく理解して伴走してくれ、講師を交えた振り返りの場もつくってくれました。

都城工業高校
甲斐正人さん



「ジョブシャドウイング」に向け、生徒の心構えや企業側の理解を深めるという点で、事前にコーディネーターから直接お話ししてもらえたのがよかったと思います。実践を振り返る際に、参加者がそれぞれの端末を使ってリモートで話し合うなど、新しいやり方も提案してくれました。今後は、生徒の「専門」や「学校」の枠を超え、多様なチームで課題解決に向き合うような機会を作りたいと考えています。



コーディネーターと
つながってみよう！

1 連絡 学校から県キャリア教育支援センターに連絡・相談。

2 協議 キャリア教育実践に向けてコーディネーターと話し合う。

3 本番 授業や行事、教員向けの研修などの現場でコーディネーターが支援する。

4 省察 学校側とコーディネーターで実践を振り返り、よかった点や課題を洗い出す。

★ ※依頼書や報告書など文書提出や手続きは必要ありません。
※コーディネーターへの謝礼金、交通費は必要ありません。

COVER MODEL 三分一尚志 Hisashi Sanbuichi 上山まりあ Maria Ueyama

宮崎県キャリア教育支援センター
0985-24-3156
〒880-0835
宮崎市阿波岐原町前浜4276番地729
(宮崎県教育研修センター内)

<https://cms.miyazaki-c.ed.jp/ssc058/htdocs/>

“働き方改革”の一助にも

宮崎県キャリア教育支援センターには、様々なノウハウやコンテンツの蓄積があります。先生とコーディネーターが組めば、学校の特色や目的に合った独自のプログラムを構築することができます。キャリア教育の年間計画を立てるお手伝いもできます。「地域住民の協力を得たい」「小中学校とつながってタテの連携を進めたい」という局面でも、コーディネーターが調整役として支援します。センターの活用は、より深いキャリア教育を推進するとともに、日々多忙な先生の負担を減らす一助にもなります。



キャリア教育に悩むすべての先生のために FOR TEACHER 2024



※県教委は高2対象の調査(2025年)で、「将来の夢や目標を持って自分の生き方を考えている」と回答する生徒が全体の95%にのぼることを目標としています。

宮崎県キャリア教育支援センター 0985・24・3156



対話でぶつける日

高鍋高校

1年生が地域の職業人との対話を通じ、自分の進路を考える同校独自のプログラム。コーディネーターらの呼びかけで、経営者、看護師、自衛隊員、サッカー選手ら多様な職業人14人が協力した。準備期間は3カ月。「自分の良さを見つける」「社会に参画する態度を育む」といった学校側の目的を生徒や職業人のみなさんとしっかり共有したうえで本番に臨んだ。生徒からは、「25分じゃ短い」「もっと話したかった」との声が相次いだ。



職業人インタビュー

宮崎商業高校

飯野高校

宮崎商業は、1年生のキャリア教育授業で職業人にインタビューをして成果をプレゼン資料にまとめた=写真㉔。プロのライターから取材の基本を学び、本番ではコーディネーターらが募った職業人28人に記者会見形式で質問を重ねた。飯野では、1年生が地元の職業人を取材して冊子『好き』を見つける仕事図鑑を作成した=写真㉕。元新聞記者のコーディネーターが取材・撮影・文章・編集について解説した。両校の生徒は、「問う」力を育み、働く意義を学んだ。



もっと深く！
もっと広く！

活動紹介

2023年度の主な実践を列挙します。
コーディネーターは5人。
県内のどこへでも出向きます。

ジョブシャドウイング

都城工業高校

中学校で経験済みの職場体験とは違った形式を求め、「ジョブシャドウイング」を採り入れた。働く人に影(shadow)のように付き添い、仕事の様子を間近に観察するプログラム。学校側の教育効果を主眼にしつつ、企業側にも能動的に取り組んでもらうため、計画段階から人事担当者に参加を要請した。企業・生徒それぞれの事前研修と振り返りをコーディネーターが担い、双方の意識を高めた。

進路講演会

都城さくら聴覚支援学校

生徒の自己理解を深め、職業観の育成を目的にした講話。依頼を受けたコーディネーターが「働くとは=〇〇」という謎解きのようなタイトルで、生徒たちが働く意味を自分で問えるような構成で話した。生徒のほか、職員、保護者も聞き入った。担当教員は「働く目的や自分にとっての幸せについて考え、社会とつながる大切さを学ぶ機会となった」と振り返る。



ひなた場

飯野高校 × 4 中学校

ひなた場は、児童・生徒が「人生の先輩」と1対1で対話するプログラム。地域の大人を招くケースが多いが、えびの市の4つの中学校では、飯野高校の生徒が先輩役となり、中学生と語り合った。コーディネーターが中学生全員に対し、本番で使う「人生グラフ」の作成を指導。当日の進行役も務めた。高校生たちは、中学生の夢や悩みに耳を傾け、自分自身のこれまでの生き方を振り返ることで、自己理解を深めるきっかけとなった。写真は、同時開催の「人生紙芝居」で自分史を語る高校生(右奥)。



総合的な探究の時間

宮崎東高校

「少人数・個別最適な学び」を充実させるため、コーディネーターが年間を通じて生徒のメンターとして寄り添った。繊細な感性を持つ生徒も多く、新入年次では自分の興味・関心に気づく「自己探究」に取り組み、2年次以降、さらに思考を深めていく。コーディネーターは生徒の伴走者となり、生徒が「ジョハリの窓」の「盲点の窓」(他者は知っているが、自分では認識できていない自己のこと)に気づくきっかけを与える役割を担った。担当教員は「コーディネーターが生徒にどう接しているのか、先生方に間近に見てもらおうという狙いもあった」と話している。



課題解決プログラム

宮崎西高校附属中学校

中学2年生のプログラム構築の依頼を受けたコーディネーターが、宮崎市フェニックス自然動物園と学校をつなぎ、動物園の活性化をテーマとした。生徒たちは施設面の改善策、アプリやグッズの導入、入場料の改定など様々なアイデアを考案。園長の助言を受けつつ、検討を重ねた。生徒発案の「動物の足跡のTシャツ」が商品化され、社会とつながる実感をかみしめることができた。高校生向けにもカスタマイズできるプログラムだ。



保護者向け講演会

高千穂高校

ベテランのコーディネーターが2年生90人と保護者70人を前に「君たちはどう生きるか」という演題で話した。社会の変容に伴い、就活の現場や新入社員を迎える企業にどんな変化が起きているのかを解説。「学校や家庭が子どもに将来のことを考えさせきれていない」と問題提起し、「子どもは可能性に満ちている。大人が子への接し方を変えていく必要がある」と呼びかけた。